



目次

1. 授業評価アンケート改善提案
2. 公開授業の実施状況と改善提案
3. 各部局のFD活動
教育人間科学部、国際社会科学研究科、理工学部、経済学部、
都市イノベーション学府
4. 「学生FDサミット 2012 冬」参加報告
5. TA研修会のお知らせ

授業評価アンケートの改善提案

FD推進部専任教員 安野舞子

授業評価アンケートの見直し論点

本年度のFD推進部・活動重点テーマの一つである「授業評価アンケートの抜本的改革」を遂行すべく、FD推進部会の授業改善ワーキンググループ（WG）では、年度始めから集中的にアンケートの見直し作業を行ってきた。ただし、「授業評価アンケートの見直し」とひと口に言っても、そこには様々な側面から検討すべき事項が含まれている。そこで、授業改善WGでは、アンケートの見直し論点を下記のように設定し、議論を進めてきた：

- ・名称
- ・実施時期・方法

- ・記名／無記名制
- ・アンケート結果の開示
- ・アンケート結果に対するフィードバック
- ・アンケートの質問項目
- ・自己点検票
- ・ローデータの返却

なお、授業改善WGでの検討にあたっては、WG委員が所属する学部の同僚教員からの意見、FD合宿研修会（平成23年8月30日）での「授業評価アンケート」に関するセッションにおける議論、学生FDグループ主催のイベント「しゃべり場：授業評価アンケート革命」（12月1日）での議論も参考にした。

改善提案

実は、授業改善WGでの見直し作業プロセスの中で、予期せぬことが起きた。それは、全学規模での「ポートフォリオシステム」の導入(平成25年度)の決定である。このICTを活用した学士課程教育の新たな展開において、授業評価アンケートをどうするか(システムの中に組み込むか、組み込む場合、どのように組み込むか、等)という議論は今後当然起こってくる。

そこで、授業改善WGでは、今年度については「現時点での必要最低限の見直し」に留め、もう一年(平成24年度)かけてアンケートの抜本的な改革を行う、ということで途中から議論の舵を切り替えた。

その「現時点での必要最低限の見直し」として改善提案をするのが、前頁論点項目の中の「名称」の変更と「ローデータの返却」に関することである。

名称の変更

アンケートの正式名称は「学生による授業評価アンケート」であるが、そもそもこのアンケートが導入された目的は、学生に授業を「評価」してもらうことではなく、個々の授業の「改善」に役立てるためであった。そこで、従来のアンケート名称から「評価」という言葉を除き、「学生による授業アンケート」とすることを提案したい。

ローデータの一部返却とそれに伴うアンケート項目の順番の入れ替え

見直し議論の中で、「アンケートの回答データを自分で分析して授業改善に活かしたいので、希望する教員にはローデータを返却してほしい」という意見が出た。しかし、ローデータの返却には課題が多く、それをそのまま実現することは難しい。しかし、それに準じる方策はないでもない。

もともと、この「ローデータの返却」議論で期待されていたことの一つは、「自由記述欄に

意見を書いた学生の受講態度(出席頻度や学習意欲など)が知りたい」というものであった。それならば、従来マークシートから切り取って返却されていた自由記述部分に加え、受講態度項目の記入部分も合わせて返却できるようにすれば、その期待に応えられることになる。そこで、マークシートの自由記述回答に加え、受講態度項目(受講動機、出席頻度、授業外学修時間)のデータを合わせて返却することを提案したい。

それに伴い、アンケートの質問項目の順番を、上から「自由記述」→「受講態度」→「授業の進め方・内容」→「総合評価」と変更することを提案する(マークシートは、「受講態度」と「授業の進め方・内容」の間で切り離し、上部を担当教員に返却する)。

なお、「自由記述」を冒頭にもってくるメリットもここでは考えられる。何故なら、4段階評価の数値では、何をどうして欲しいのか学生の思いを汲み取ることはできないが、自由記述ではまさに学生の「生の声」が聞ける。しかし、自由記述欄がマークシートの最後にきている現状では、4段階評価の数値部分をマークするうちに力尽きて自由記述欄までたどり着かないか、どうしても良くなって何も書かない、という事が有り得る。そこで、自由記述欄を冒頭に持ってくることで、頭がフレッシュなうちに「生の声」を書いてもらえるチャンスが高くなるのではないだろうか。

次年度検討課題

今回改善提案を行った上記2点以外の見直し論点については、引き続き次年度も検討していくことになるが、各論点についてこれまで議論してきた内容は各々次の通りである：

実施時期・方法

授業評価アンケートは毎学期末に行っているが、学生からの意見を当該授業の改善に役立つ

るためには、それよりも前の時期（例えば学期中間期）に行うことが効果的である。その場合、アンケート結果が担当教員に素早く返却される必要があり、それを可能にするのはwebによるアンケートの実施である。そこで、学務情報システムのアンケート機能を使い、春学期の中間時期にあたる6月8日(水)～22日(水)にFD推進部会委員6名の計8科目の授業において「Web版授業評価アンケート」を試行した。ただし、その試行した時期は、学務情報システムのアンケート機能が完全に稼働しておらず回答結果がすぐに出なかったため、その時は回答率がどれくらいになるかに注目して実施した。

結果は、平均回答率が7.9%とかなり低く、「このままではwebでアンケート行うことは難しい」という結論にならざるを得なかった。低回答率の大きな原因は、授業時間外に行うこと、そしてパソコンからしか回答ができないことであることから、学期中間期にwebでアンケートを実施するためには、携帯電話やスマートフォンからも回答できるようにするなど、少なくとも情報システム環境の整備が必要との認識に至っている。

記名／無記名制

現状の授業評価アンケートの大きな課題は、質問項目の最初から最後まで、同一の選択肢をマークする（例えば、4段階評価中オール2など）無責任な回答がかなり多い、ということである。そこで、WGでは、無責任な回答を少しでも減らすために、「私は責任をもって回答します」という「署名」の意味を込めて学籍番号の記入をする「記名制」の導入を一旦検討した。

しかし、FD推進部会での審議の中で、記名制の導入は必ずしも無責任な回答を減らすことにはならない、という意見も出たことから、当面は従来通り無記名制で実施しつつ、FD推進部会委員の一部の授業で試行的に記名制で

アンケートを行い、学生の反応を見てみることを来年度の検討事項とした。

アンケート結果の開示、教員からのフィードバック、および自己点検票

学生の声を聞いてみると、多くの学生は、「自分の回答を教員がどれだけ受け止めてくれているのか、どれだけ授業改善に活かしているのか分からない」と思っている、とのことであった（それが、無責任な回答の大きな原因—「どうせ真面目に答えても意味がない」という諦め—とも考えられる）。それに関連して、一部の学生からは「アンケート結果を公開して欲しい」という意見もあったが、多くの教員は結果の公開に抵抗感を感じていること（結果が一人歩きして悪用されることへの懸念）、また、別の学生の意見にあるように、学生は「平均値等の数値を公開されてもあまり意味がなく、それよりも自分たちの意見を教員がどう受け止め、どう改善に活かしてくれるのかが知りたい」と思っていることも事実である。そこで、アンケート結果の公開は当面行わないことにしつつ、アンケート結果を受けて教員はどう思ったか、どのように改善するのか、改善要求を呑めない理由は何故か、等のコメント（フィードバック）を公開する方向性で今後議論を進めることになった。

このフィードバック制度は、従来の自己点検票の作成に替わるものとして考えており、フィードバック制度が導入されるまでは、教員の作成負担をより軽減できる記入内容に変更した自己点検票を存続させることを考えている。

アンケートの質問項目

万が一、平成25年度から導入されるポートフォリオシステムを使って授業評価アンケートを行う場合、質問項目を見直す可能性が出てくるかも知れない。一方、ここ数年、アンケート項目の一部が変わり続けており、経年変化を見れないという問題も懸念される。よって、ア

アンケート項目の見直しは次年度に行うことが 検討されている。

公開授業の実施状況と改善提案

FD兼務教員 物部博文

平成 23 年度公開授業の実施状況

今年度は各部局の先生方の協力の下に、春学期に 11 科目、秋学期に 6 科目の公開授業を行った。以下に実施された公開授業を示す。

<春学期>

◆行動科学

村本 由紀子教授 6月14日(火)6時限
経営学部講義棟(B棟)207教室

◆デジタル信号処理

市毛 弘一准教授 6月24日(金)3時限
工学部講義棟A201教室

◆リスク分析学

三宅 淳巳教授 6月27日(月)2時限
工学部講義棟A104教室

◆地盤工学

谷 和夫教授 6月28日(火)3時限
工学部講義棟A109教室

◆日本語 J201

小川 誉子美教授 6月29日(水)1-2時限
留学生センター104教室

◆環境有機化学

大谷 裕之教授 6月29日(水)3時限
教育人間科学部7号館210教室

◆産業組織論

中嶋 亮准教授 6月30日(木)4時限
経済学部講義棟212教室

◆流体力学 I

松本 裕昭教授 7月6日(水)4時限
工学部講義棟A110教室

◆マーケティング論 I

鶴見 裕之准教授 7月8日(金)6時限
経営学部講義棟(B棟)105教室

◆中等保健体育科教育法

落合 優教授 7月12日(火)2時限
教育人間科学部7号館201教室

◆インベスティゲーション実習

武田 淳教授 7月21日(木)3時限
総合研究棟ロビー/2階知物会議室

<秋学期>

◆自然地理学(火山の話)

吉田 圭一郎准教授 11月15日(火)4時限
教育人間科学部7号館201教室

◆地方財政

伊集 守直准教授 11月16日(水)3時限
経済学部講義棟2号館211教室

◆知材経営論 II

岡田 依里教授 11月16日(水)3時限
経営学部講義棟2号館106教室

◆材料力学 A

高橋 宏治准教授 11月25日(金)1時限
工学部講義棟 A110 教室

◆行政法Ⅱ

廣田 達人准教授 11月29日(火)4時限
経営学部講義棟 1号館 201 教室

◆国民会計論Ⅱ

大森 明准教授 12月1日(木)4時限
経営学部講義棟 2号館 208 教室

平成24年度公開授業の改善案

本年度については、例年と比較して多くの公開授業が開催され、参加者からは「勉強になった。」という声が寄せられた。その一方で、一授業あたりの参加者数は2~3人と少なかった。また、時間が合わないので公開授業に参加できないという声も寄せられた。従って、次年度は、公開授業の目的を焦点化するとともに、参加人数を増やすために初任教員の研修の場や職員等も参加対象とすることで参加人数を増やし

たく、以下のような方針とした。

<春学期>

目的 初任教員の研修としての場として、ベストティーチャーによる優れた授業を参観し、初任教員研修の一環とする。初任教員が授業を公開し、授業改善する機会とする。

また、FD推進部による公開授業も実施する。

<秋学期>

目的 授業を広く公開し、それぞれの研修の場とする。・ベストティーチャーによる優れた授業を参観し、教員の授業研究とする。教員が自らの授業を公開し、授業改善する機会とする。
・教員同士で相互に授業を参観し、自らの授業改善のきっかけとする。学生FDスタッフ、職員、教員が公開授業に参加、ふりかえりを実施する機会を設けて、相互理解を深める。

公開授業についてのご意見や提案のある方は、FD推進部までご一報ください。

教育人間科学部ベストティーチャー賞受賞者による公開授業

教育人間科学部 赤木範陸

はじめに

各部局に於けるFD活動の一環としての公開授業もようやく定着して来たように思われる。春期と秋期に行なわれるようになったのは今年度からのことであり、これからも継続することで公開授業の機会を多く持ち、より多くの参観者を獲得し、その意義を強めていきたいところである。春秋ともに全学的に一定期間(二ヶ

月ぐらいの間)に公開される事を前提にしているために授業によっては公開出来るコマが期間をはみ出してしまう事もありうるだろうが、教育人間科学部では参観者獲得の為に臨機応変に対処したいと考えている。

大谷裕之先生の講義

「環境有機化学」

この講義は平成23年6月29日(水)に教育人間科学部7号館210教室で3限時に行なわれたもので、その概要は、「芳香族求電子置換反応3」(二置換ベンゼン化合物の合成経路)という科学者でなければ理解し難いような講義のように思っていた。化学には多少の知識があるつもりだったがすでに記憶は古く、講義概要を見ただけで少し気が引けてしまったが、その授業を参観していて次第に引き込まれていくように感じたのは参観者だけではなかったようで、周囲を見ると学生たちも集中している様子で私語は無く、居眠り、うたた寝の類いなども皆無であった。学生たちを引き込んでいくのは授業の進め方であり、先生の授業そのものが持つ授業力であるように思われた。特別な道具や最新の機器を使っている訳でもなく、昔ながらの板書で化学式が並ぶ黒板に学生たちが食い入るようにノートに書き写している様子は古き良き時代にあった学びを彷彿とさせた。先生の話し方には感情の起伏のようなものは余り感じられず、声の抑揚も少ない話し方のようにだったが、良く通る声で明瞭であり、殆ど学生の方を見ながら声を発していた。黒板には関係なさそうに思えるいくつかの化学式の説明がされ、そしてまた別の化学式へと進んでいく。それがある時点からは急に分解されたパズルがくみ合わさるように形をなしていき、網の目が結ばれるようにつながり、遂には一つとなって現れる。ああ、そうか、これを分からせるためだったのか、とようやく気づく。気づくとやたら面白い。この気づきが学生たちの脳を刺激するのではないだろうか。脳内でシナプスどうしが繋がった瞬間の心地よさがいい。次の授業でもまた学生たちは昔ながらの板書に食い入ってしまうのだろう。

吉田圭一郎先生の講義

「自然地理学」

春期の大谷教授の講義に続き秋期11月15日(水)4限時に教育人間科学部7号館201教室で行なわれた講義であり、概要は「火山の話」とあった。火山の種類を思い出しながらぼんやり思い出しながら教室に入った。まず授業に先立ってプリントが配布されたので一瞥すると、1問目にはかつて習った覚えのある地形が問題になっていて答えは文字でなく地図に塗り込む。



課題に取り組む学生

2問目は意外とむずかしいが、これも答えの範囲を塗れば良い。右脳と左脳が活性化したところで授業に入る。なるほど地理学ならばその双方の脳が必要なのだと思った。授業はプロジェクターでPCの画像をスクリーンに投影させながら進めるというやり方なのだが、画像が有っても文字がない。パワポのようにスマートに文字だけが画面の端から出てくるのかと思っていると、吉田先生がPCの前でカタカタとキーボードを打ち始めた。その時々画像、例えば火山の形状や噴火の仕組みというような要点を板書ではなくPCに書いていく。PCの情報はプロジェクターで映し出され、学生たちは違和感無くそれをノートに写す。画像のみを示したあとに板書をする、というよりもこの方

が合理性を持っている。或は、私が期待したようにパワポで文字情報が美しく画像の上に登場したら、已に完成された教材が教室でプレゼンテーションされているだけの授業になっていたのだろう。授業はプレゼンとは違う。多少の労力と時間は要るが、この方法の方が遥かに学生とのコミュニケーションはとれているのだと思った。文字が投影され、削除されていく様は、学生たちには「自分たちがPCで書く」ときの場を想起させるようだ。学生たちとの距離が近いように感じた。この教室授業の後に学生たちは吉田先生とともに8号館の前に行き、授業で知った火山の噴火の仕組みを、コーラにメントスを入れて吹き出させる実験で歓喜していた。

公開授業乃ススメ

公開授業はそれを見る側の教員が分野や専門を超えて自身の授業の参考とするに資するものを備えてある事は言わずもがなだろう。どのような授業も多かれ少なかれそうだ、という向きも有るかもしれないが、ある一定の評価を得たものというのは一瞥の価値はあるもので「まあ見ておいてよかった」と云う場合も少なくない。同時に授業を公開する側の教員も参観

する側が異なるカテゴリーに属する教員であっても普段のように対学生とは異なって、見られているという意識が或る度合いの緊張感を誘発するため、自らの言動を意識的に自身へフィードバックする効果を促進する機能があり、これが自身の授業を客観視する機会につながるならばより良い授業への思惟の糧となる事は間違いないだろう。

大切なのは動き続け変わり続ける事であって、(過去の授業もその時代は優れた授業であったわけで、最初から古くさい退屈なものではなかった) 淀めばたとえ今は良い授業であっても、以前とは異なった(或は新しい)教育で次から次に育ってくる学生たちには、大学の授業がいつしか古くさく退屈なものに変質しているのかもしれない。そうならない自信があればなおのこと、影響を受ける事を忌む必要はないのだから「忙しいけど取り敢えずちょっと見てみるか」ぐらいの寛容な気持ちで授業を参観して「あれは使えるかな」とかほんの少しでも得した気分になればそれでいいのだろうと思う。その些細な気持ちだけで陰で努力している同僚たちが報われるのです。

国際社会科学研究科国際経済法学系のFD活動

国際社会科学研究科 関ふ佐子

定着の進んだFD活動

国際社会科学研究科の国際経済法学系(大学院)では、とりわけ法科大学院にかかわる厳しい外部評価などとの関係で、FD活動に力を入れてきた。授業アンケート、学生の意見を聞くご意見箱(つながるくん)、公開事業などを、法律系の大学院にみあう形で実施してきた。

本年度は、これまで行ってきた施策をさらに改善させてきた。例えば授業アンケートの結果は、科目名も含めて公開するなど、制度の定着にともない、それぞれの制度が成熟しつつある。

授業アンケート

国際経済法学系では、学期ごとに2回、すな

わち年に4回、日本語と英語の双方で授業アンケートを実施している。各学期の第1回目は、中間期に実施する自由記載方式のアンケートである。第2回目は、学期末に行うマークシート方式のアンケートである。それぞれの授業を改善するためには、学期の途中で学生の意見を聞き、それをその後の授業に活かすことが有用であることから、具体的な評価が可能な自由記載形式のアンケートを中間期に実施している。そして、それを受けて、教員が取り組んだ改善点も含めて、マークシート方式のアンケートで、学期末に総合的な評価を行うわけである。

アンケートの結果は、各教員に紙媒体で配布するとともに、学生には結果を閲覧できる形で開示している。各設問に自由記載形式で答える中間期のアンケートの結果は、第1に、即座にコピーし、担当教員に渡している。これにより、個々の教員は、その後の授業を見直すことが可能となる。第2に、個々の手書きのアンケートを事務職員が打ち込み、見やすい形にフォーマットしている。これは従来、どの科目への意見か分からない形で、学年ごとに、公法、民事法、刑事法といった、科目群ごとに結果をまとめた。これを本年度は、授業アンケートの結果を開示する方法が定着してきたことを受け、科目名も含めて公開する形にした。そこで、結果を見る各教員や学生は、具体的にどの授業について、どのような評価がなされているかが分かる形となった。

各教員の授業アンケートをまとめたものが出来上がると、関連科目の教員が集まり、お互いの授業についてコメントしあう。例えば、民事法の担当者間や、刑事法の担当者間という形で、お互いの科目について、より理解しており建設的な見解を述べやすい者が集まり意見交換するわけである。科目名の具体的な公表により、こうした会議において、より建設的な意見交換が可能となった。授業の在り方が、より

厳しく問われる形となったのである。

期末アンケートは、結果を機械で読み込み、それを各科目ごと、および各科目群それぞれについてグラフ化している。これを、各教員に配布し、授業全体の評価をしやすい形にしている。

この他、中間期のアンケートにおいて、各教員は、結果を受けて授業改善計画書を書き、受講生に返信している。これにより、学生の見解を受けて改善を努力する予定の点を伝えるとともに、授業方法を変更すべきではない点については、なぜ現在の形で授業を行っているか、学生に説明することが可能となっている。

公開授業

法律系では、全学で行う公開授業に加えて、公開授業週間を2週間設け、その間は、全ての授業に全教員が参加可能な形をとっている。

全学で行う公開事業としては、本年度は、写真のとおり、廣田達人准教授の「行政法Ⅱ」が公開された。授業については、授業を参観した全学FD委員及び国際経済法学系の教員が、授業の感想を廣田准教授に伝えた。



公開授業：廣田准教授

国際経済法学系内で行う公開授業は、すべての授業を対象としており、毎年、半期に一度行われていた。本年度からは、その中の法曹実務専攻の公法系、民事系、刑事系の各教員(近接科目の教員)は、同じ系の他の教員の授業を少なく

とも1回は参観せねばならない形とした。さらに、公開授業週間の終了後、各系ごとに教員が集まり、参観について意見交換を行い、責任者は、その結果について簡単な報告書を専攻長まで提出することとした。

こうした改革により、教員間の相互研修という公開授業の目的が、より実質的に達成されやすくなった。

ご意見箱：つながるくん

学生が命名した「つながるくん」は、学生の声を大学に届けるためのご意見箱である。届いた声はFD委員会で内容から依頼先を振り分け、関係委員会や専攻長に届ける。関係委員会は、届いた意見を検討し、必要事項について対応後、その声にどのように対応したかについて、学生に掲示やメーリスなどを通じて返答しなければならない。FD委員会は、ここまでの処理がなされたか否かについて、随時確認する形で、学生の声に大学が迅速・的確に応えるよう見守ることになる。学生が特定教員のみで改善してほしい点を伝えた場合、それが学習環境の改善につながる場合もある。この点、つながるくんは、FD委員会が学生の声を検討し、対処の動向について見守るところに意義がある。

本年度は例えば、夏の節電に際して、自習室のある建物の空調の一括管理により、部屋の温度が、30度など、勉強のできないほどの温度に上がりすぎている点などについて声が寄せられた。そこで、不必要に温度が上昇しすぎないように、空調が調整されることになった。この他、自主ゼミ用の部屋が足りないといった、各種の要望が届いており、適宜、教室を調整するといった形で対応している。

このように、事務職員や教員の目が届かない事項について、随時学生の生の声に耳を傾け、学習環境の改善にスピーディーに対応することに、つながるくんは役立っている。

FD活動の改善に向けて

この他、FD委員会では、学生のニーズに応えるべくOB会と連携するなど、各種の形で、学生の学習環境を支援している。

授業アンケートのように、細やかな対応をする形で、FD活動の改善を試みている。しかし、細やかな対応にあたっては、事務職員の作業量も増え、これは容易ではない。そうした事務職員や教員の負担とのバランスを考慮しつつ、今後も、よりよいFD活動に向けて少しずつ施策を改善することが望まれる。

理工学部のFD活動

理工学部 眞田一志

平成23年4月1日に設置された理工学部は、表1に示すように、4学・13教育プログラムから構成されている。各学科・教育プログラム(EP)でFD活動が実施されているが、ここでは主に理工学部として平成23年度に実施したFD活動と、理工学部の主な行事を紹介する。

表1 理工学部の学科と教育プログラム

学 科	教育プログラム (EP)
機械工学・材料系 学科	機械工学 EP
	材料工学 EP
化学・生命系学科	化学 EP
	化学応用 EP
	バイオ EP

建築都市・環境系 学科	建築 EP
	都市基盤 EP
	海洋空間のシステムデザイン EP
	地球生態学 EP
数物・電子情報系 学科	数理科学 EP
	物理工学 EP
	電子情報システム EP
	情報工学 EP

1. 理工学部全体オリエンテーション

全学統一ガイダンスが平成 23 年 4 月 7 日（木）に開催された。同会場で引き続き、理工学部の第 1 期生を対象に、理工学部全体オリエンテーションが開催された。理工学部の第 1 期生が一堂に会し、理工学部長、副学部長、各学科長の挨拶の後、1 期生の中から応援ボランティアの学生が壇上に上がり、入学にあたっての抱負を語った。あらたな大学生活を始めるに際し、高い志を掲げ、しっかりとした挨拶が続き、教員一同感心したことがいまでも強く印象に残っている。



図 1 平成 23 年度理工学部
全体オリエンテーション

2. オープンキャンパス

平成 23 年 8 月 6 日（土）・7 日（日）に、オープンキャンパスが開催された。理工学部としては初めてのオープンキャンパスだった。理工

学部への参加者数は、6 日が 3,600 名、7 日が 3,400 名、計 7,000 名であった。平成 22 年度の計 5,100 名を大幅に上回り、大変盛況だった。模擬講義の教室も満席で、立ち見の教室も数多くあった。さらに、理工学部の全体説明会も建物の外まで行列ができる状態になり、急遽説明の教室を増やして対応するほどだった。当日は猛暑だったが、今後は廊下や屋外で待つ状態がないよう、対応が必要であると感じた。

参加者アンケートから、感想を紹介する。

「研究室の中が見れたり、どんなことをしているのか見れて良かった。」「文系の私が理工系の情報に興味を示しました。魅力満載でした。」

「遠くから来たかいたのあったオープンキャンパスで良かった。」「この大学を目指したいという気持ちになりました。」「初めてのオープンキャンパスだったのですが、とても充実していて、大学の雰囲気がよくわかりました。」

3. 理工学部長と語る会

4 月の理工学部全体オリエンテーションで応援ボランティアとして活躍した理工学部 1 期生の学生 10 名に秋学期開始時に集ってもらい、授業や学生生活について理工学部長と語る会を開催した。「高校生の時から雑誌でみていた有名な先生の講義が聴けて感激した」、「授業のレベルが高く大学にきたことを実感した」、「時間割がぎっしり詰まっているのには驚いた。」、「もう少し自由に選択できるのかと思っていた」など、率直な声を聞くことができた。理工学部長からは講義を受けた先生の名前を挙げるように問いかけがあった。しっかりと覚えている学生もいれば、時間割を取り出す学生もあり、学生と教員の距離について考えさせる場面だった。

各教育プログラムでは、新入生を歓迎する各種イベントを催している。これらのイベントは、新入生のためだけでなく、教員にとっても教育

に取り組む姿勢をあらためて考える良い機会である。



図 1 理工学部長と語る会 (10月11日(火))
12:00-13:00

平成 24 年度は、学科別オリエンテーションと学生の声聞く会などを“理工学部ウェルカムイベント”と名付け、新入生が大学生活を円滑に始めるための契機となる諸活動を企画、運営することとし、そのためのワーキンググループを設置した。

4. 理工学部 FD 委員会

各学科・教育プログラムではそれぞれ FD を実施しているが、理工学部として FD を推進する委員会として理工学部 FD 委員会を設置した。平成 23 年 10 月 18 日に第 1 回委員会を開催し、FD 推進部会で検討されている授業評価アンケートなどについての審議が開始された。

5. 公開授業の開催

春学期に「デジタル信号処理」(市毛弘一准教授)、「流体力学 I」(松本裕昭教授)、「インベスティゲーション実習」(武田淳教授)を、また秋学期には「材料力学 A」(高橋宏治准教授)を開講した

6. おわりに

理工学部は新しい学部であり、設置 1 年目の平成 23 年度はさまざまな FD をいかに円滑に軌道にのせていくかが主な活動だった。平成 24 年度は、実質的に FD 活動を推進し、理工学部の教育改善に貢献することが期待される。

経済学部における FD 活動

経済学部 邊英治

経済学部では、毎年若手教員を中心に、公開授業を実施している。今年度は、春学期に 2011 年 6 月 30 日(木曜日)4 限、産業組織論(中嶋亮准教授)が公開され、秋学期に 2011 年 11 月 16 日(水曜日)3 限、地方財政(伊集守直准教授)が公開された。両准教授とも、他大学で専任教員として経験を積まれたのち、本経済学部に着任された経歴を有しており、前任校での講義経験を活かした新鮮でメリハリのある分かりやすい授業が行われていた。

中嶋先生の「産業組織論」では、公開授業の

折にはゲーム理論がレクチャーされていた。印刷された特製の配布教材をふまえつつ、板書形式によるオーソドックスなスタイルの授業である。後で、中嶋先生から伺ったが、かつてはパワーポイントによる形式を採用したこともあったが、学生の集中力維持という観点から板書形式に戻したとのこと。この点、筆者には、とかくビジュアルな方向に誘導しようとする授業評価アンケートのあり方にも再考の必要性が示唆されているように感じられた。



「産業組織論」授業の様子

ゲーム理論という抽象的な内容に親しみをもてるよう、たこ焼き屋さんの事例やあるカップルがオペラ鑑賞とボクシング鑑賞のどちらを選ぶかといった事例など、身近な例が多用されることで分かりやすく丁寧な説明が行われていた。説明を 30 分程度した段階で、配布教材の練習問題に取り組みせ、学生を順番に指名してその解答を問うていた。周知のように、受講者数が 100 名を超える大人数講義では、学生自身は教員からみられていないと錯覚して記号と化してしまう。このように学生を次々と指名することで、学生を記号から脱却させ、緊張感にあふれる授業とすることは、大人数講義における学生の記号化に対抗する有効な処方箋といえよう。あとの授業の振り返りの際にも、中嶋先生は如何に学生の緊張感を 90 分間保持できるかに注意を払っているかという点を強調されていた。

伊集先生の「地方財政」では、公開授業の折には地方債についてレクチャーされていた。国債と地方債は、現代の財政問題の中でもやはりホットイシューであり、熱気のコもった授業が展開された。ちなみに、経済学部には、神奈川県庁をはじめ地方公務員志望の学生が少なく在籍している。授業形式は、印刷された配付資料を参考にしながら、口頭での説明をメインとしつつ、板書によってキーワードや概念整

理を行うというオーソドックスなスタイルであった。



「地方財政」授業の様子

地方債の発行原則・手続きや赤字財政の地方公共団体に地方債発行はどこまで認められるのかという制約の問題など重要なポイントについて、国債のケースと比較しつつ、分かりやすい説明が行われていた。受講者数が 100 名を超える大人数講義であったが、プライマリー・バランスの読み方など特に重要な箇所については、学生を順番に指名して解答とその解答に至った理由を答えさせることで、緊張感を維持していた。あとの授業の振り返りの際にも、伊集先生は、なるべく後ろに座っている学生を指名することで、講義にある種の一体感を持たせることを心がけているとのことであった。そのせいか、筆者には、前の方にも学生が進んで着席しているという印象を受け、この指名方式は奏功しているように感じられた。

以上、今年度の公開授業を総括してきた。両講義とも、大人数講義であるにもかかわらず、緊張感のある講義が行われていたことが印象的であった。そのために、各先生とも相当な創意工夫を凝らしており、筆者も感銘を受けた。こういったノウハウは、今後新任の先生方にも活用されていくことになるだろう。

新学府の開設と都市基盤EPのFD活動ー都市イノベーション学府

都市イノベーション研究院 谷 和夫

都市イノベーション学府の開設

都市イノベーション学府は、持続可能性と創造性を基本理念として、都市における機能合理化の拠点としての社会システムから意味充実の拠点としての生活世界へのパラダイムの移行を志向する教育組織として 2011 年度に新たに開設された。この新学府では、都市に係る多様なイノベーションを目指す創造性ある高度専門職業人（博士課程前期）と、都市イノベーション研究の世界的な展開の土台を担う、グローバルに通用する複眼指向のリーダー（博士課程後期）の育成を目標としている。教育理念の観点からの特徴は、文系と理系の枠を取り払う文理融合型の教育を志向している点と、少人数制の実習・演習・研修を教育の柱に据えてケーススタディーやコースワークを重視した実務家型人材養成を目指した点である。

博士課程前期は建築都市文化専攻と都市地域社会専攻の2つの専攻で、それぞれ建築都市文化コース、建築都市デザインコース、横浜都市文化の3コースと都市地域社会コース、国際基盤学コースの2コースから構成される。また、博士課程後期は都市イノベーション専攻の1専攻である。教育方式には専門分野教育方式とスタジオ教育方式の2つがある。前者は、修士論文の提出を課す従来型であるが、後者は実習・実践科目であるスタジオ科目の比重を大きくし修士論文の代わりにポートフォリオの提出を課す新しい教育方式である。

中央教育審議会答申「新時代の大学院教育」への対応を目指して「都市」をキーワードにさまざまな新機軸を盛り込んだ都市イノベーシ

ョン学府は、今のところ大きなトラブルもなく順調に滑り出したようである。大学におけるFD活動が主に学部教育を対象としてこれまで行われてきたために、この新学府でも今のところ特筆すべきほどのFD活動は行われていない。しかし、社会の高度化に伴い大学院教育の重要性が増すことは間違いなく、学部教育と同じく継続的なFD活動を大学院教育にも展開すべきである。来年3月には初めての前期の修了者（修士）を輩出する予定であるため、まずは修了生を対象に新学府の教育理念の達成の評価、課題の抽出などの調査と分析が必要であろう。その上で、さらなる教育サービスの充実を目指して、積極的なFD活動が望まれるところである。

都市基盤EPのFD活動

筆者は担当する学部教育は、理工学部の建築都市・環境系学科の都市基盤教育プログラムであるため、当該教育プログラム（EP: education program）における特徴的なFD活動について以下に紹介する。

【JABEEの中間審査を受審】

都市基盤教育EPが「土木および土木関連分野」について、2011年10月にJABEE（日本技術者教育認定機構）の中間審査を受審した。日本技術者教育認定制度とは、大学など高等教育機関で実施されている技術者教育が、社会の要求水準を満たしているかどうかを外部機関が公平に評価し、要求水準を満たしている教育

プログラムを認定する専門認定 (Professional Accreditation) 制度である。JABEE (Japan Accreditation Board for Engineering Education) は、技術系学協会 (土木系の場合は (公社) 土木学会) と密接に連携しながら技術者教育プログラムの審査・認定を行っている。

当該 EP は工学部の建設学科のシビルエンジニアリングコースとして 2008 年に初めて受審し、社会の要求水準を満たしている教育プログラムとして認定されました。しかしながら、教育点検システムや教育目標とカリキュラムの関係の学生への周知方法などについて改善が必要であると指摘を受け、この指摘事項に対する改善が十分になされたかどうかについて中間審査を受けることとなった。

審査は、事前に提出する自己点検書の内容に関する書面審査だけでなく、審査チームが大学に赴き (10月23日 (日)、24日 (月) の2日間)、講義に用いられる教材類や各種の会議類の議事録などの確認や、教員、在校生、卒業生との面談なども行われた。

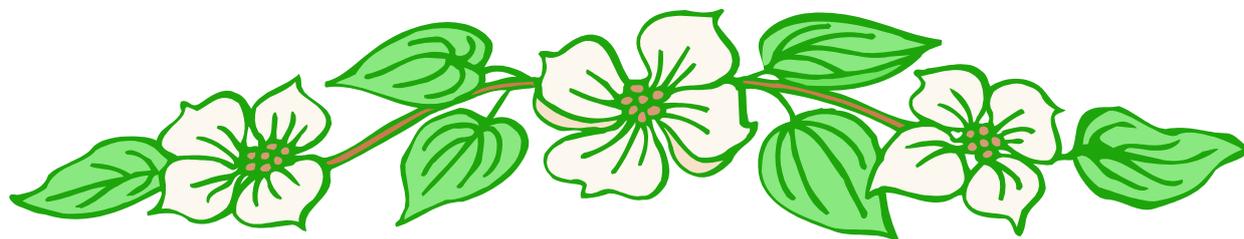
最終的な審査結果は年度末に提示されるが、

年末に示された一次審査報告書によれば、前回の受審時にW (認証評価基準をほぼ満足しているが、その適合の度合いが弱く、改善を必要とする) と判定されていた項目はすべて解消していた。ただし、残念ながらC (認証評価基準を満足しているが、改善が望まれる) と判定される項目がいくつかあった。主に教育点検に関する項目であり、教育プログラムを継続的に改善する教育点検システムを強化するため、不断のFD活動が重要であることを再認識した。

【卒業時アンケートの実施】

都市基盤教育 EP では、数年前より卒業式の日 に学部の卒業生と大学院の修了生を対象に教育に関するアンケートを行なっている。なお、昨年度は3月11日に発生した東日本大震災の影響により、新年度になってから実施した。質問事項は、教育目標、カリキュラム、講義、成績評価、施設や教育支援体制などについて回答を求め、土木工学分野における教育サービスの改善に反映させている。

(次ページにアンケート用紙掲載)



卒業（学部）・修了（大学院）時に行なう教育改善のための評価アンケート（用紙）

学部・大学院教育に関する評価アンケート

土木工学教室

卒業／修了おめでとうございます。

土木工学の教育改善のため、以下の評価アンケートに協力下さい。

学部生はあなたがこのコースで受けた学部教育について、 大学院生はあなたがこのコースで受けた大学院での教育について、 下に上げる各項目について、あなたの考えを 5 段階でお答えください(あてはまる番号に○をつけてください)。	非常に 思う	やや 思う	どちら とも いえない	あまり そう 思わない	全く そう 思わない
	5	4	3	2	1
1. 教育の理念、目的が示されており、理念目的にある学生像に適った教育が実施されていた。	5	4	3	2	1
2. 大学または大学院にふさわしい内容・方法で理論的かつ実践的教育が行われるよう、教育課程が編成されていた。	5	4	3	2	1
3. 教育目標を達成するために十分な授業科目が提供されていた。	5	4	3	2	1
4. 必修科目、専門科目等の区分や配置が適切だった。	5	4	3	2	1
5. 単位は教室での授業と予習復習を重ねることで与えられます。					
5.1 教員が教室等で行う授業は、シラバスに示したとおりだった。	5	4	3	2	1
5.2 教員は、学生が予習復習を行う時間をとる配慮をした。	5	4	3	2	1
6. 授業科目で、授業を受ける学生数は適切だった。	5	4	3	2	1
7. 授業についてうかがいます					
7.1 専門知識の習得を確実にし、批判的検討能力、創造的思考力、分析能力及び議論の能力を育成するために、授業科目に応じ適切な方法がとられていた。	5	4	3	2	1
7.2 1年間の授業の計画、各科目における授業の内容及び方法、成績評価の基準と方法があらかじめ周知されていた。	5	4	3	2	1
7.3 授業の効果を十分にあげられるよう、授業時間外における学習を充実させるための措置が講じられていた。	5	4	3	2	1
8. 履修授業数を各学期にバランスよく配分することができるカリキュラムとなっていた。	5	4	3	2	1
9. 成績評価についてうかがいます					
9.1 成績評価の基準が設定され、かつその通りに成績が評価されていた。	5	4	3	2	1
9.2 成績評価の結果が、必要な関連情報とともに告知されていた。	5	4	3	2	1
10. 学生が在学期間中に履修に専念できるよう、また、教育課程上の成果を上げるために、履修指導の体制が十分にとられていた。	5	4	3	2	1
11. 教員と学生とのコミュニケーションを十分に図ることができるよう、学習相談、助言体制の整備がなされていた。	5	4	3	2	1
12. 教育補助者(TA、チューター等)による学習支援体制は適切だった。	5	4	3	2	1

13. 履修に専念できるよう、学生の経済的支援及び修学や学生生活に関する相談・助言、支援体制の整備がされていた。	5 4 3 2 1
14. 障害を持つ学生について、施設及び設備の充実を含めて、学習や生活上の支援体制の整備がされていた。	5 4 3 2 1
15. 学生支援の一環として、学生が主体的に進路を選択できるように、必要な情報の収集・管理・提供、ガイダンス、指導、助言がされていた。	5 4 3 2 1
16. 研究を実施するために、あるいは教育のため必要な十分な専門知識を持つ教員が置かれ、効果的な指導を受けることができた。	5 4 3 2 1
17. 在学中に達成できた教育、研究に満足している。	5 4 3 2 1
18. 事務体制は、適切に整備され、事務職員が適切に置かれ、対応も適切だった。	5 4 3 2 1
19. 教室、演習室、実習室、自習室などの種類、規模、質及び数は、必要かつ十分であった。	5 4 3 2 1
20. 設備及び機器は、教育及び研究を効果的に実施するために必要で、かつ技術の発展に対応するために必要かつ十分な水準に整備されていた。	5 4 3 2 1
21. 図書館の規模や内容は、教育及び研究並びに学生の学習を支援し、効果的に成果を上げるために必要かつ十分な水準に整備されていた。	5 4 3 2 1
22. 在学中に国家試験など資格試験の合格実績や、コンペティションや学会での受賞はありましたか？ある、ない のどちらかを丸で囲んでください。 また、受賞実績があれば、(差し支えなければ)以下にその名称を教えてください	1.ある 2.ない
23. あなたは社会人入学あるいは留学生ですか。該当するときは丸で囲んでください	1.社会人 2.留学生
24. あなたの所属を丸で囲んでください(昨年度3月時点)	1.博士課程後期 2.博士課程前期 3.学部

差し支えなければ、記名をお願いします

氏名 _____

ご協力ありがとうございました。

なお、お答えいただいた情報は、機密を確実に保持するとともに、今後の土木工学の学部・大学院での教育改善評価目的のための統計データとして利用する以外に一切使用することがないことをお約束いたします。

『学生FDサミット2012冬』参加報告

FD推進部 上野誠也

追手門学院大学での開催

平成24年2月25日(土)～26日(日)の2日間にわたり『学生FDサミット2012冬』が「大学を変える、学生が変わる」をテーマに、大阪の追手門学院大学で開催された。学生FDサミットは平成21年に立命館大学で開催されてから5回目を迎えるが、発祥地を始めて離れた開催となった。回を重ねるたびに参加大学と参加者が増え続け、今回は56大学340名の参加となった。学生を巻き込んだFD活動が全国に浸透している状況を数字が如実に物語っている。大学における教育改善を学生の視線で提案し、学生の勉学意欲を満足する授業に改革しようとする流れである。併せて、学生の授業に対する意識改革を進める効果もある。



会場の追手門学院大学

学生FD活動の歴史は数年前に端を発する。岡山大学や立命館大学の活動が口火となり、全国へ展開していった。今回の開催校の追手門学院大学も平成21年度に学生FD活動を開始した大学である。しかし、その後の学生主体の積極的な活動が群を抜いており、急成長を遂げた。

本学の教育改善学生スタッフ(通称:学生

FDスタッフ)を立ち上げる直前のFD合宿研修において、追手門学院大学から学生スタッフならびに教職員を招いて、講演を依頼したことがある。学生FD活動の代表する大学であり、追手門学院大学教育研究所を中心に全学的な取り組みが感じられた。



横浜国立大学の参加者

本学は、学生FDスタッフを中心に、この学生FDサミットへの参加者を募った。残念ながら、代替わりの時期ということもあって、参加者は今野綾香代表(教育人間科学部3年)と3名の臨時スタッフの参加となった。臨時スタッフは、昨年12月の学生FDグループの企画「しゃべり場」でFD活動に興味を持った大石晃悦さん(教育人間科学部1年)、立石航太さん(理工学部1年)、野崎寛子さん(教育人間科学部1年)である。さらに、日頃からFD推進活動に熱心な工学研究院等技術部の長谷川紀幸氏も参加し、FD推進部門長の上野を含めて6名が参加した。この参加者うち、今野さんと長谷川氏はそれぞれの立場で学生FD活動に対する講演を依頼されており、学生FDサミットにおける本学は常連校として認識されている。

白熱の2日間

学生FDサミットに参加して、学生の熱意を感じられずに過ごすことはできない。企画・運営が全て学生の手で行われ、教員はそのサポート役でしかない。プログラムは、初参加者への入門講座がオープニングにある一方、経験者にも新たな気づきを与えるワークが用意されていた。全てが学生の手による進行であるが、部屋の移動時間も考慮された正確な運営が行われ、時間にルーズな教員達は見習うべき点もあった。

学生FDサミットの売り物は「しゃべり場」である。学生・職員・教員が一緒になって、教育改善について語り合う場である。今回は2日目に企画され、身近にできる教育改善を見つけることが議論された。

『学生FDサミット2012冬』プログラム

1日目	10:30-12:30	オープニング
	13:50-17:20	分科会
	17:35-19:05	懇親会
2日目	10:30-10:50	オープニング
	11:05-14:40	しゃべり場
	14:50-15:45	3つのワーク
	15:55-16:20	収穫祭
	16:20-16:45	エンディング

学生FDサミットの新企画

継続的に開催されている学生FDサミットであるが、マンネリ化を防ぐために、新たな企画も行われた。今回は多くの参加者に登壇してもらい、数々の事例を紹介するために、初日に分科会方式を取り入れた。学生の立場、職員の立場、教員の立場から、授業改善をどう考えるべきかを発表する場である。それぞれの考えを紹介することで、人にアイデアを与え、また、人からアイデアをもらう趣旨である。学生は大学で勉強をしたがっているということを痛感

させられる講演が続いた。それに答える教員の授業や職員のサポートが必要である。



休憩中も熱気のある主会場

「大学を変える、学生が変わる。」

急激に膨張した学生のFD活動は、全国的に広まりを見せた。学生FDサミットを実施する場所がないほどに成長した。今回のサミットに参加して、本学の学生によるFD活動の展開に期待することがあった。

まず、この学生FD活動が実際の教員現場に活かされているかということが問われている。既に、学生提案による授業が開講されている大学がある。学生と教職員が同席した全学教務委員会を開催している大学もある。学生目線で教育改善を行わなければ、本当の教育改善にならない。先駆者の経験を活かして、本学も学生FDスタッフの活動を深く成長させたい。

活動の中心が西日本に偏っている。開催地が大阪ということもあって、関東からの参加校は15校にとどまっている。これに対して、関東でも積極的な情報交換の場を設けようと東洋大学や法政大学などが中心に関東圏FD学生連絡会を平成23年に立ち上げた。この連絡会に本学も国立大学の立場から参加し、教育改善の情報交換を関東圏で進め、学生によるFD活動を広く成長させたい。「大学を変える、学生が変わる。」時代である。

TA 研修会

- その対応は正しいですか? -

TA（ティーチング・アシスタント）も大学の教育を担っています。**大学教育の質**が問われている現在、よりよい教育を実現するために、TA向けの研修会を開催します。新規採用のTAの院生が対象ですが、継続採用のTAや教職員も参加できます。

◆開催時期：

実験・演習担当	平成 24 年 4 月 2 日
講義・ゼミ担当	平成 24 年 5 月 30 日

詳細はポスター等で連絡いたします。多くのTAが参加するように声を掛けて下さい。よろしくお願い申し上げます。

主催：大学教育総合センターFD推進部

本誌への原稿を募集しております。また、ご意見・ご感想をお寄せください。

YNU FDニューズレター No. 19

編集／横浜国立大学 大学教育総合センターFD推進部

作成担当：ニューズレター・ワーキンググループ

事務担当：教務課大学教育係

問合せ先：kyomu.kyoiku@ynu.ac.jp

発行／平成24年3月